水の源

MIZU NO MINAMOTO

Autumn 2016
34

獣害対策最前線

ウォークルポ
女性が活躍する獣害対策
島根県美郷町

特集
地方創生「首長勉強会」
講師：認定NPO共存の森ネットワーク
澁澤寿一理事長

首長リレー連載
高知県大豊町
岩﨑憲郎町長

水源の里のうまいもん
ジビエソーセージ
高知県東洋町

愛知県設楽町 「田口祭」
開催日：10月8・9日
御堂山観音と白山神社の例大祭に合わせて行われる。初日の夜は花火大会、２日目は弓の披露や山車、神輿が担がれる。写真は大迫力の手筒花火。一般の方も参加可能。

巻頭インタビュー　水源の里へ思いを馳せる
人間が獣害を招かないために～本質的な獣害対策～
鳥獣害対策専門家　井上雅央さん

巻頭インタビュー
水源の里へ思いを馳せる

聞き手:『水の源』編集長　町井且昌

人間が獣害を招かないために
～本質的な獣害対策～

鳥獣害対策専門家
井上 雅央（まさてる） さん

Profile 井上 雅央さん

1949年奈良県生まれ。愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了。京都大学博士（農学）。独立行政法人（現:国立研究開発法人）農業・食品産業技術総合研究機構・近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チームの元チーム長。「決定版！獣害対策:女性がやればずんずん進む」（農山漁村文化協会）等、著書多数。全国で鳥獣害対策の講演を行っている。

――先生は、今は島根県にお住まいですね。

56歳まで奈良県で仕事をしていましたが、今から12年前に島根県に移住し、この土地の獣害対策に携わっています。

――全国で獣害は年々増える一方です。鳥獣害の被害額というのは全国でどれくらいあるのですか。

年間200億円ぐらいといわれています。頭を抱える農家さんも多いと思いますが、その解決策を動物の専門家や猟師さんに求めるのは間違い。そうじゃなくて自分の畑や自分の田んぼの問題だと考えなくてはいけない。イノシシやシカが悪いのではなく、実は、彼らを引き寄せ、増やすような農業をしていることが問題なんです。原因が分かれば、問題の解決はすごく簡単。住民の意識の変化によって改善の兆しが見られるところもあります。

――具体的にはどうしたらいいのでしょうか。

例えば、人間は冬でもエサをドンドン与えているんです。今は刈り払い機を使いますね。昔カマでやっていたころに比べてはるかに広い範囲の草を刈る。そのあとすぐに新芽が出てくる。だから10月に草刈機を1時間使ったら、シカ1匹が一冬を越せるだけの草がすぐに生えてくる。行政も大規模な土木工事をやると、のり面には全部牧草を吹き付ける。通年緑化を目指しているので、冬でも青々と茂る寒地型の牧草が生える。だからいつもエサが豊富にある。動物にとって、こんなにいいことはありません。そのことに気付いたら、解決策は自ずと見えてきます。まず10月の草刈りはやめましょう。そうすると来年の4月の草刈りはやらなくていい。冬の枯草が新芽の生育を抑えてくれるからです。

考え違いをしているのは、獣は山にエサがなくなったから里に下りて来ると思い込んでいることです。これは間違いで、実際は里の動物だけが増えている。今はとにかく動物が増える環境を整えてしまっているわけです。だから、例えば10月の草刈りを控えるとか、収穫しない柿の木は切るとか、そういう身近なことで獣は減るのです。

――最近は家に近いところでイノシシが罠にかかったりします。これは全国的な傾向でしょうか。

一般的にはそうなんですけれども、獣がなぜ増えるのかをよく理解しているところではイノシシの害は減っています。本質的な対策をせず単に殺すというのは、被害防止とかイノシシの数を減らすのに何の役にも立たない。だから私たちの町、美郷町では駆除が解決策だと思っている人はいません。

――水源の里（限界集落）では田んぼも少ないし、草刈りをすることもあまりないですが、そういうところはイノシシやシカが減っているのでしょうか。

そこで1年を通して、どれだけのエサがあるかですね。例えば、たくさん実る栗の木や柿、ヤマモモがあって、誰もそれを獲らないというような状況であれば、エサが豊富にあることになります。すると、人間が少ない地域でも動物は増えていきます。

昨年度農林水産大臣賞をとった熊本県のあさぎり町のある集落は、戸数5軒、人口10人です。そこではサルとかイノシシが悪いと考えていたけど、実は皆で餌付けをしていたんじゃないかということに気付きました。美郷町の実例を学んだんです。そうするとドンドン被害が減り、集落にも元気が出てきました。

私は、限界集落の「限」には元気の「元」、限界の「界」という字には快適の「快」をあてはめた、「元快集落」になろうと言っています。

――シカとイノシシは共存できるのですか。

できますが、シカが増えてくるとイノシシ的にはちょっと困ります。どうしてかというと、例えば、仲のよい二人が一緒に焼肉を食べに行く。一人は生焼けが好きで、一人はよく焼けたのが好きだ。いざ食べ始めると、焼ける前に生焼け好きな方が全部食べてしまう。イノシシとシカは丁度そのような関係で、稲でもイノシシは穂が出ないと食べられない。シカは葉でも茎でも食べる。いろんな雑草も両方とも食べるけど、どれもシカの方がちょっと若いのを食べる。だからシカが増え過ぎるとイノシシにとっては都合が悪いんですよね（笑）。

――イノシシにも悩みがあるわけですね（笑）。

Walk ウォーク ルポ Repo

女性が活躍する獣害対策

島根県 美郷町

【取材・文：岩岡 廣之】

青空朝市サロンが開かれる場所（写真提供：美郷町）

獣害対策で町おこし！

田舎で暮らす住民にとって、今や喫緊（きっきん）の問題となっている有害鳥獣による作物被害。自治体やJAなども被害額を算出して対策に乗り出している。農家の玄関先にシカが現れた、収穫寸前の作物をイノシシに根こそぎやられた、と嘆く農家。小さな家庭菜園であれ、収穫間近の作物を荒らされると栽培意欲を無くしてしまう状況にある。顔を見れば可愛いシカやサルも、この時だけは許せない憎い動物になってしまう。

今、このような状況は日本各地で発生している。巻頭インタビューの井上雅央さんの講演会をきっかけに、獣害対策を逆手にとって町おこしをしている、島根県の美郷町を訪ねた。

活気ある青空朝市サロン

京都から中国自動車道を西へ、広島県の三次（みよし）ICで下りて国道54号を北にしばらく走り、島根県に入る。中国山脈を南北に横断しているのか、下り坂が続く。三次から１時間ちょっと、県道のトンネルを抜けると中国山脈を源流域とする大河、江（ごう）の川（かわ）が貫流する美郷町の中心部に着いた。自然に恵まれた美郷町はそのほとんどが山林で、谷も深い。この山深い里でどのようにして獣害を防ぐのか、興味がわく。

青空朝市サロンに集う人々

井上さんから、毎週水曜日に獣害対策をしている地域の女性たちが朝市を開いていると聞きつけ、訪ねてみた。県道沿いにある小さな小屋では、7時過ぎから準備にかかっていた。5つの集落の女性たちが当番で準備をするのだという。青空朝市サロンと名付けられた市場には、おにぎりや漬物、サラダ、コーヒーも準備され、この地域の婦人たちの週に一度の情報交流の場となっていた。朝市の商品はキュウリやナスなど自家菜園でとれたものばかり。駐在所のおまわりさんも駆けつけ、ちゃっかりと防犯状況を伝えていた。

サロンではIターンやUターンのメンバーにも出会った。この町出身の下村弥生さんは、大阪市内に嫁ぎ、ご主人に田舎暮らしの良さを説いているという。15年前から美郷町に通い、ご主人の理解度も高まった。幼馴染みもいて故郷の素晴らしさを実感しているそうだ。逆にこの町出身のご主人よりもすっかり美郷町民になりきった人もいる。自称「草刈おばさん」、ある人からは「女優」とも呼ばれている都志見サト子さんだ。母屋をリフォームし、田舎の民家に合う木目調の調度品を取り揃えた。都会の人だったら誰もが憧れそうな暮らしだ。「明日から孫たちが来ます」と目を輝かせていた。この青空朝市サロンに集う女性たちが獣害対策のキーマンだ。

女性が積極的に対策に参加

婦人会を中心に獣害対策を説いたと語る井上さん。きっかけはこうだ。美郷町連合婦人会の安田兼子会長によると、役場の職員で町の活性化に取り組む産業振興課の安田亮さんから「有害鳥獣対策専門の先生がいる、一度話を聞きませんか」の呼びかけで、男性も含めて、何かいいことがあればと思い講演を聞くことになった。「鳥獣が増えるのは人間が餌付をしているからだ」と井上先生。講演は一度聞けばそれで終わりと思っていたが、もっと詳しく勉強がしたいと声が上がったという。再度、交渉してOKが出た。美郷町での獣害対策の始まりだった。

町外から獣害対策を学びに訪れたみなさん

対策はそんなに難しいことではない。自分たちが畑にエサを残している、秋には柿などを収穫せずに放置している、頷けることばかりだったと安田会長は振り返る。

対策を始めて、作物が被害に遭わないなら良いものをもっと上手に作ろう、という機運が芽生えたという。

この間井上さんは奈良県から、島根県にある当時の農研機構・近畿中国四国農業研究センターの鳥獣害研究チーム長に就任、住居も美郷町に構え、対策のノウハウを実践でアドバイスすることになる。地域としてはこれ以上の教科書はない。

昼間留守をする男性に代わって、おばちゃんたちも積極的にかかわることになった。例えば、井上先生のサル対策はこうだ。「集落内でサルにのんびりフンをされている間は人間の負け戦、サルがエサをかすめて、フンもせずに逃げるようになれば、そのうち群れは来なくなる」と。連合婦人会のメンバーをはじめ、この地域で車に乗る人全員がロケット花火（点火すると

女性たちも携帯しているロケット花火

火花を噴出しながら約20メートル飛び、パーンと発音する）を準備していて、サルを見つければ花火で脅す、花火の音を聞きつければ隣りの人もサルを確認して追っかけて、さらに花火を焚く。とことん追っ払うこと、これこそ最強のサル対策だそうだ。この作戦は今も実行されている。

獣害対策のモデルに

成果が上がっているとして、各地から美郷町へ視察団が来るようになった。平成21～25年度に65件だったのが、26年度には81件、今年は毎週のように全国各地から、大学の研究グループや北陸のテレビ局も取材に訪れている。

取材に行ったこの日も美郷町の南に位置する広島県安芸高田市から、女性も加わった18人が訪れた。美郷町乙原の県道の下が教室となり、井上さんがイノシシやサルの生態を説明。「人間が無意識のうちに鳥獣に餌付けをして繁殖させている」と繰り返し力説していた。

防御策の一つ、電気柵の設置について、グラスファイバーのポールを使い、線は結束バンドでとめると十分の一の費用で出来るという。人がいない所なら昼間も通電しておくと効果がある。また、イノシシ除けに使うトタンの模範的な張り方なども現地指導していた。

グラスファイバーのポールを活用した電気柵

「山くじら」と呼ばれるイノシシ

有害鳥獣は町の資源

合併前の平成11年、邑智町ではイノシシが急増し、駆除された頭数は年間700頭を超えた。捕獲１頭当たりの報奨金は6,000円、当時の町の予算の2倍を超える異常繁殖ぶりだったそうだ。今年の4月から6月にかけての捕獲数は135頭、そのほとんどを檻で捕獲、確認の方法は自治体によって異なり、多くは写真やしっぽで確認するが、美郷町では現地確認を徹底している。

「厄介者」のイノシシはたくさんいる。しかし、それが安定して捕獲出来れば「資源」になると思考を変えた。美郷町では今、これまで「ぼたん」や「山くじら」と呼ばれてきたイノシシ肉を「おおち山くじら」のブランド名で商品化。安藤広重の浮世絵をもとにデザインした商標を登録、地域創造の柱としている。

商品化のポイントは「イノシシを捕獲する際の組織にある」と安田亮さんは語る。これまでは猟師さんに頼むとイノシシを獲る事だけが目的になり、夏場に獲りすぎれば猟期の資源が無くなるとか、猟師間の縄張り問題があるとか、狩猟と獣害対策を混同してしまう弊害があったのだ。

そこで、これまでの駆除班＝猟友会から、直接被害を受ける農家に免許を取ってもらうシステムに改めたそうだ。町長をトップに、駆除班長、駆除班員とピラミッドの組織が形成され、被害を受ける側が捕獲をすることになった。この組織こそが「おおち山くじら」を資源化に導いた。

安藤広重の浮世絵をもとにデザインした「おおち山くじら」ブランド

駆除対策から生まれた「おおち山くじら」は精肉加工につながり、今年2月からは缶詰工場の稼働にこぎつけた。地元では消費力が弱く、ここだけでは経営が成り立たないとして、精肉も缶詰も東京に卸しているという。

みさと猪ベーション

食の他に……安田さんが一人で温めていた事業も軌道に乗ってきた。捕獲したイノシシの皮革を活用することだ。こちらは商業ベースではなく、地域の女性たちの生きがい事業として進めている。

野生のイノシシの皮はキズ物としてこれまで使われてこなかった。このキズ物であることをウリにした革製品を作っている。以前、水田が少ないこの地域は養蚕業が盛んだった。縫製業にかかわる女性が多かったため、手縫いの技術を持っている。その匠の技を生かせるのが、革製品づくりというわけだ。

毎週水曜日、青空サロンが終わると、女性たちは集会所で小さな革製品の製作にあたる。首からぶら下げるネームホルダー、ペンホルダー、小銭入れ等々、“OHCHI YAMAKUJIRA オンリーワン”と命名した一品だ。

みなさんで集まってやると元気のもとに

売り方もインターネットや販売店を作らず、集会所に来る人か、口コミでしか買えない製品にした。関心のある人なら訪ねて来てくれるし買ってくれるという考えだそうだ。売り上げは僅かな金額にしかならないが、「おばちゃんたちのやる気、元気、ボケないという成果になり、買ってもらえれば嬉しい。嬉しいことがあると女性は輝く！町の活性化は女性が輝くことです」と安田さんは話す。

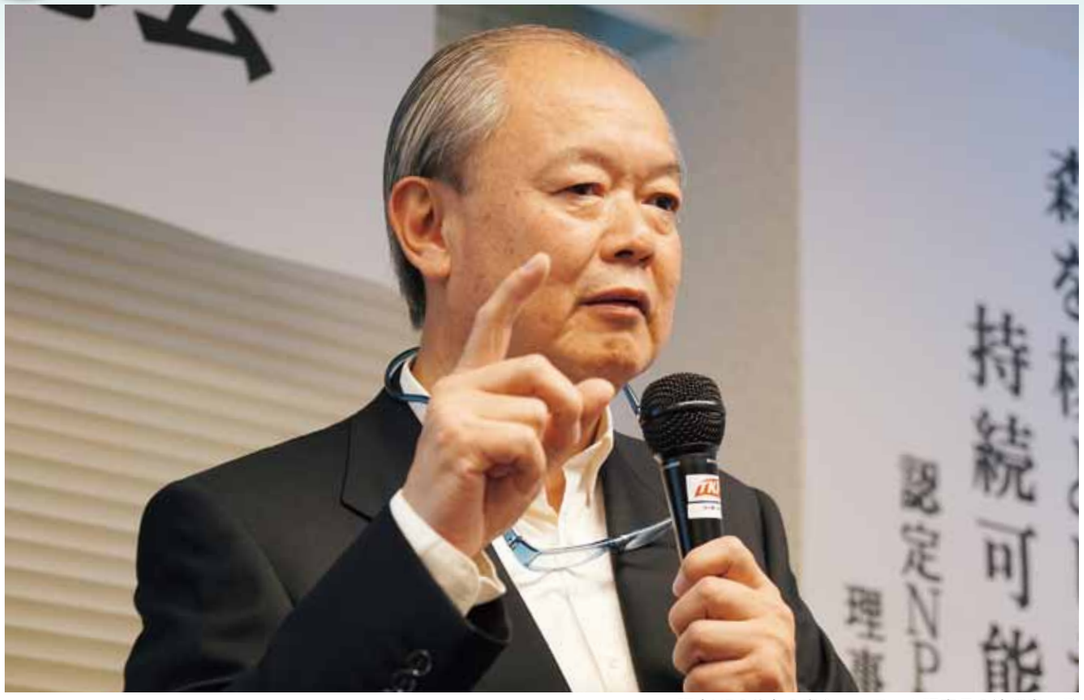
獣害対策から生まれた、美郷流の地域創造“みさと猪ベーション”。これまでのノウハウを蓄積して次なる目標を追求している。山深い里、美郷町の挑戦はつづく。

革製品を作っているところ

イノシシの皮で作られたネームホルダー

美郷町はこんなまち

人口約5千人、面積282.9㎢。島根県の中央部に位置し、中国地方で最も雄大な河川「江の川」が町を貫流。両岸には中国山地の緑が連なる。町内には多くの温泉があり、江の川を活用したカヌーや鮎釣りが観光資源となっている。
町内にはJR西日本の三江線（江津と三次を結ぶ108.1km）が通っているが、JR西日本は2016年9月に廃止を表明した。9月末にも廃止の届出がされる見通し。江の川と並行する三江線は車窓からの景色がよい路線であり、ぜひ足を運んでいただきたい。



認定NPO共存の森ネットワーク理事長の澁澤寿一氏

首長勉強会　～地方創生の実践を学ぶ！～

森を核とした持続可能な社会づくり

昨年の「地方創生『首長勉強会』～地方から始めるニッポン・イノベーション！」に続き、地方創生の実践を学ぶ勉強会が6月9日、TKP東京駅日本橋カンファレンスセンターで開かれた。認定NPO共存の森ネットワーク理事長で、岡山県真庭市の「地域再生マネージャー」として真庭バイオマスツアーの立ち上げなどにも関わられた澁澤寿一（しぶさわじゅいち）氏が、「森を核とした持続可能な社会づくり」と題して講演。22自治体から31人が参加し、澁澤氏の経験談から地方創生のヒントを探るべく熱心に聞き入った。

澁澤寿一氏講演

「聞き書き甲子園」で若者が見た社会

今年で15年目を迎える「聞き書き甲子園」は、毎年全国から100人の高校生が参加し、森や海、川で生きてきた100人のおじいさん、おばあさんたちの人生を「聞き書き」する作業です。これまでに1,500人の人生の記録が残ったことになります。その中で高校生たちが気づいたことは、「もう二度とこの森を作ることができない」ということ。250年かけて作られた森は、6世代7世代とつなげない限り、同じ森を作ることはできません。「世代をつなぐ」という感覚が全く欠落していたということに彼らは気づいていきました。

今、環境問題の中ではよく持続可能性が議論されていますが、実は私たちの社会自体が持続不可能になっているのだと思います。

「聞き書き甲子園」でお世話になった、山形県の90歳のマタギ（猟師）の話をご紹介したいと思います。老人は熊狩り以外にも、田んぼを耕し野菜を作ります。暖を取るために薪を切り、病気になると山へ行って薬草を採ります。小学校しか出ていない彼は、生きるということをすべて自分でやるのです。一方、高校生たちは、いい大学に入っていい会社に就職するために勉強をします。自分が教わってきた社会と老人が生きてきた社会が全く違うものだということに気づかされるのです。

聞き書き甲子園の様子（撮影：奥田高文）

1,500人の記録を見ていると、明らかに日本という国が変わった時期があります。それがちょうど50年ほど前、1964年の東京オリンピック前後。高度経済成長期にかかり、テレビ、冷蔵庫、洗濯機という三種の神器が私たちの暮らしに入ってきました。新幹線が走り、高速道路がつくられ、農村では牛や馬に代わり耕運機が登場、田舎にオート三輪が走り出したのもこの時期です。今の便利な暮らしのベースがつくられました。

参加した高校生たちは何となく、この急激に変化した生活や価値観が、これから100年も200年も続くことはないだろうと思っています。私たちの暮らしは基本的に化石燃料で賄われており、それ以前の山や川や自然の成長量の中で生きてきた時代とは明らかに異なります。日本は先進国といわれていますが、物質文明と経済における先進というだけのことです。もし全世界の70億人の人々が日本人と同じ暮らしをしたら、地球が３個必要だとも言われています。それほどこの50年の暮らしというのは、当たり前の暮らしではないということです。私たち先進国が、地球上のすべての人たちの生き方の先進性を示しているわけではないのです。私たちはもう一度、地球や人類が、どこを目指していくべきかを考える必要があります。

仮想経済の上に存在する社会

お金の問題についてお話しします。私の曽祖父の澁澤栄一がこの国に「資本主義」というものを持ち込みました。日銀総裁を務めた孫の澁澤敬三は、私がまだ幼いころ『自分のじいさん、栄一がこの国にとんでもないものを持ち込んだ。資本主義はこのまま進むとどうなるかわからない』という話をしていました。貨幣というのは世界の共通言語です。英語が通じないところは世界中どこにでもありますが、マネーだけは世界中どこでも通じます。そのマネーが巨大化し、実質経済の70倍か100倍、あるいはもう1,000倍近くになっているのではないかといわれています。

私はトヨタ自動車の人材育成の仕事をやっていますが、今、トヨタ自動車は最大の危機です。去年の決算額は過去最高益ですが、その会社が実は存亡の危機なのです。それはなぜか。つまり過去最高益の利益は、為替によって出た利益だからです。モノづくりの努力によって報われるのではなく、為替というものが結果を左右してしまう社会になっているのです。これはなにもトヨタだけの話ではなくて、農業や漁業などの第１次産業までも、為替によって左右される社会を、現実に私たちは生きています。

本当にお金が私たちの暮らしを保障してくれるのか、もう60年以上も前にそのことに警鐘を鳴らしている人たちがいました。社会を構成するものは、経済のほかに文化もある、医療もある。たとえば祭りとか教育とかそういうこともあるかもしれない。あるいは、愛だとか慈しみという人間の感情もあるかもしれない。しかし、このまま経済を野放しにすると、今度は経済がそれらをすべてのみ込むようになるのではないか。すでにそうなっていないか、ということを私は心配しています。

何が本質的な価値か

私は東日本大震災の後、被災地に入り、いろんな集落を見て回りました。そこでの一番の願いは祭りの復興。自分たちの集落をつなげてきた祭りを復興させたいという切なる思いです。しかし、祭りの復興に対して国の予算はつきません。その理由は費用対効果です。皆さんの行政もそうだと思います。

費用対効果はすばらしい言葉ですが、見方を変えればそれはすべてをお金に価値換算しようとするもので

熱心に聴講する参加者

す。お金に換算できないものは価値ではない。それを私たちは長年続けてきました。その間に手の間をすり抜けてしまった、本当に大切なものはなかったのか、ということを私は震災の現場でずいぶん感じさせられたのです。

一方で私たちの暮らす日本は、かつては自分の食べ物は自分でつくる国でしたが、この50年間で食糧自給率は39％になりました。食物を育てるよりも、もっと付加価値の高いものを加工して得たお金で、世界中から効率よく食べ物や資源を手に入れるという方向に切り替えたのです。この価値をつくってきたのは政治家でも農水省の役人でもなく、マーケット、つまり私たち消費者です。消費者がそういう価値観で生きてきた、それが豊かでいい社会だと思ってきたのです。本当にそうなのかということを見直さないと、水源の里はじめ皆さんが日々生活をされている地域というものが、もう一度社会の中で日の目をみることはないと思います。日本人がこの価値をどう考え直すかということを、私たちは今、突き付けられているのだと思います。

生きる目的と幸せのかたち

現代の高校生たちは「安心できる人生のモデル」がないといいます。親世代は基本的に進むレールが同じ、「すごろく」のような人生に一生懸命だった。しかし彼らは何に対して懸命になればよいか、がんばる意味さえ全くわからないというのです。

近年、農山村の問題、過疎地の問題がいろいろと議論されていますが、都市に問題はないのでしょうか。食糧自給率１％の東京、２％の大阪、３％の神奈川。エネルギーに関しては完全に海外依存です。本当に都市の現状が日本の目指すべき姿なのでしょうか。私は、都会よりも中山間地域の方が日本の20年先をいっていると思っています。中山間地域が､20年後の日本のモデルを今まさにつくっているのです。東京にない生き方を見つけ、そこで若者たちが何に対して一生懸命になれるかというそのモデルを創造していかなければなりません。中山間地域はそういう立場なのだと思います。

皆が幸せな社会とは何でしょうか。霞ヶ関の若い官僚に地域活性化とは何か質問すると､「有名になること、人、モノ、お金が集まってくること」と答えます。しかし私が地方を回って感じることは、地元で食べていければいいというお年寄りが圧倒的に多いということです。「これからも自給をしていきたい。子どもたちが帰ってくる、若い世代が住み着く地域を作りたい」。誇りを持って故郷で生きているお年寄りにたくさん会ってきました。農作業や山仕事を死ぬまで続けたいという方が圧倒的に多い。自然とともに生き、そして自分が人の役に立っているということを感じる、これが精神的、肉体的に最善の健康法だと思います。

ここで「産地直売」というものを例に挙げますが、このシステムは当初なかなか社会に受け入れられませんでした。一月３万円程度の売り上げしかない産直は農業ではなく趣味の世界だと。しかし、今や全国規模で拡大しています。産直の本当の目的はお金儲けではなく、自分が社会で必要とされていると認識することだと思います。自分が出したタケノコをわざわざ毎年買いに来てくれる人がいる､作ったトマトを喜んで買ってくれる人がいる、自分が社会の役に立っているんだと感じることが最大のメリットなのです。霞ヶ関の若手官僚が考えている地域活性化と、私たちが目指す活性化というのは、形が違うと思っています。

田舎の暮らしと都会の暮らしを比べてみると、基本的に田舎は、人間関係の「おたがいさま」という互助相助で成り立っています。住民は家族の延長、コミュニティーは強固。プライバシーより共同体、あたたかいけど煩わしい社会です。一方、都会はとなりに住んでいる人の顔も知りません。すべてをシステムに頼ります。自分の食べるものがどんなところで作られているかも知りません。関心ごとはイチゴ一個の値段が安いか高いかだけ。便利だけど冷たい社会です。どっちかがいいというわけではなく、両方いきすぎなのだと思います。しかし、明らかに都会化がさらに進んだ社会の中に未来はないと思っています。そうなると、人類はたぶんこの地球上で生きていくことができなくなるでしょう。

地方で築く持続可能な社会

ここで島根県の中山間地域研究センターが作成した人口の増減を示すデータをご紹介します。決して交通の便がいいところ、都市の近くや道路の近く、そういうところに人が増えているわけではありません。自分の集落を残そうと活動したところに人は増えているのです。当然なくなる集落もあります。しかし、自分たちの集落を残したいという思いが人口を増やすのだと、私たちを励ましてくれる、大変ありがたいデータです。

持続可能な社会を作るには、あの250年の森をつくれるような世代を超えた関係を、もう一度つくらなければなりません。

里山資本主義といわれている岡山県真庭市の事例も、この関係を「木材資源で結びなおしたい」と思ってはじまった事業です。真庭市の取組の中では、たとえば新しい産業の創出だとか、二酸化炭素量の削減だとか、地域経済の内在化だとか、そういう数値やお金で計れるものも確かにありました。しかし最も大きかった成果は、人間関係の信頼ができたことです。最初は、市民も業者も行政も総論賛成、各論反対。大げんかもありました。それでも最後は団結して地域が動き出したのです。結局、人間関係を築いてきたのだと思います。地域の自治だとか未来の暮らしを自分たちがつくるのだということを住民がわかってきた。そしてそれを見ていた次世代が育ちはじめた。私たちが緑豊かだとか自然と文化の保全だとか言っているようなことは、実は貨幣価値では計ろうと思っても計れないのだということに改めて気づいたのです。

若者が選択する新たなライフスタイル

真庭市で始まった「真庭なりわい塾」の原型が、トヨタ自動車の人材育成事業､「豊森なりわい塾」です。トヨタ自動車の社員が半分で、あとは公募で集まってきた人たち。30人くらいの塾生で始まりました。トヨタに週３日行って、あと４日は地域で働くというライフスタイルを見つけようという塾です。

「仕事に人を合わせることをやめた。地域のいろんな役割を担いつつ、地域と自らの未来を重ねながら次世代に続く働き方、生き方の模索･実験を行いたい」という考え方を持った若者たちが増えてきました。塾を開講した８年間だけで、約50人ぐらいの塾生たちがIターンUターンで地域に入ってきました。皆、いろいろな仕事をしながら自分の人生を模索し生きています。

また地に足がついた暮らしを求める若者も多くなりました。「何に対して一生懸命になっていいかわからない」と言っていた若者たちが、地域の中で懸命に自分と向き合っているのだと思います。

地方発・持続可能な社会のために

今、私たちは新しい生き方のモデルづくりを地方でしないといけない時だと思っています。皮肉ではありませんが、地方創生というと何となく地方にミニ東京をつくろう、人口を増やそうとばかり言っているような気がします。しかし私は、本当の地方創生は「経済創生」ではなくて「社会創生」だと思っています。

皆さんが住んでおられる地域は、まさに20年先をいっているのです。日本の未来はこうやったら幸せな地域になれる、人と人との関係性や世代間の関係性、自然との関係性、それを今風に翻訳したらこうなりますよ、ということを社会に見せていく。これが、たぶん中山間地といわれる地域の役目なのだと思います。20年後の子どもたちに、生き方のモデルを示すという使命を、皆さんとも共有できれば幸せだと思っています。

質疑応答

Q. 総務省が行っている地域おこし協力隊について先生のお考えや事例をご紹介ください。（北海道中川町　川口精雄町長）

A. 地域おこし協力隊はほとんどが自分探し。地域のことが分かるように、地域側が丁寧に教えてあげることが必要だと思っています。また、この制度は20年ぐらい続けてはじめて評価できるもの。地域のためになる人材が一人でも二人でも出れば儲けもの、地域で育てるぐらいの気持ちで受け入れてほしいと思います。

Q. 人と人がつながる手段として、民間主導で行政がバックアップするような体制、地域共同体というものを試したいと思っていますが、やってみる価値はあるでしょうか。（北海道豊浦町　村井洋一町長）

A. ぜひ、お願いしたい。私は、地域づくりはえこひいきなしにはできないものと思っていますが、行政は公平性が原則。行政にやっていただきたいことは、お金を出すことではなく、行政の信用を担保してくれること。ぜひ、そういう組織づくりに取り組んでください。

Q. 地域で実践すべき教育の在り方についてお考えをお聞かせください。（京都府与謝野町　山添藤真町長）

A. たとえば､1997年頃、真庭の優秀な子どもは勝山高校に行っていました。けれども、農業高校と商業高校が合併してできた真庭高校、ここがバイオマス教育等の特殊なプログラムを取り入れるようになってからは、地域に残りたいという子どもたちが真庭高校を選択するようになってきました。人を育てるのは10年20年かかるので、そんな芽を成功事例として積み上げていくしかないと思います。

各市町村悩みを抱える中、「勇気を与えられた」という感想も

首長リレー連載
No.2

私たちの地方創生

高知県長岡郡大豊町
岩﨑　憲郎 町長

宝の森

杉林に馳せた夢

岩の上に杉の木がそびえ立つ1枚の写真。50年近く生長した大木がなぜ岩の上にあるのだろう。

その理由を古老に尋ねると、「昭和30年代、雑木林を伐採して木炭やまきを都会に供給し、その伐り跡に杉の木を植えた。その当時は、40年生の杉林を1ヘクタール伐採し販売すると1年間の生活費が賄えた時代だった。40ヘクタールの山林で林業専業の生活が可能と言われた時代で、杉の木を植えることには将来への大きな夢があった。そのため、岩の上の土が少ない所には、人力で土を運び杉の木を植え、その後10年近くは大きな造林鎌で草刈りをしながら大切に育ててきた。しかし、その期待は見事に裏切られた」としみじみ語ってくれました。

大豊町の今

そんな時代を経た大豊町は、四国の中央部の山間地帯で315平方キロメートルの面積に85集落が散在。2万2千人いた人口は4千人を切りました。高齢化率は56%を超え、町民の平均年齢が62.5歳という超々過疎、超々高齢社会です。

しかし、先人が苦労して育てた杉林は半世紀の生長を経て伐期を迎えており、その面積は1万7千ヘクタールあります。1年に170ヘクタール伐採したとしても100年間、その年間生長量だけでも10万立方メートルを超える貴重な資源となっています。この資源を活かしきれないところに山村の厳しい現実があります。逆にこの森林資源を活かす以外に将来への道を見いだせません。

杉林を、再度宝の山に

森林を産業政策面のみからとらえるのではなく、山村を守る地域政策、あるいは地球温暖化対策に代表される環境面からの公益的な機能を高める環境政策としてとらえ、林業の振興による地域活力の再生が不可欠です。

その取組の一つが、CLT※1（クロス・ラミネイティド・ティンバー工法）による木造ビルディングの建設です。木造ビルディング建設により、地球温暖化効果ガスの固定につながり、ビルの林を森林に変える取組です。現在、4年後の東京オリンピック選手村への採用など、積極的な運動を展開しています。

もうひとつは木質バイオマス発電です。原料となる木質バイオマスの供給に伴って森林の整備が進むことで、結果として環境機能の高い森林を再生します。フィット制度※2による国民の負担に、水や空気の供給に代表される環境機能で応えるとともに、山村にとっては生産の営みとして欠くことの出来ない取組です。

こうした取組を通じて山村に人が住むことは、山村にとって地域政策であるとともに都市部に住む人々にとっては環境政策として、都市部と山村のパートナーシップにより取り組む必要性、重要性があります。そこにこそ、環境世紀を生き抜く知恵があるはずです。

※1：CLT（クロス・ラミネイティド・ティンバー工法）とは、欧州で開発された工法で、CLTと呼ばれる木の板を組み合わせて作られたパネルを使用します。強度があるため、木造の高層建築物をつくることが可能で、国産杉の活用が期待されています。
※2：フィット制度（固定価格買取制度）とは、太陽光や風力などの再生可能なエネルギーの普及を図るため、電力会社に再エネで発電された電気を一定期間固定価格で買い取ることを義務付けた制度。

岩の上にそびえたつ杉

大豊の集落

木造ビルディング（おおとよ製材社員寮）　左：建設中　右：完成

水源の里の うまいもん お取り寄せ

【文：白波瀬聡美】

天然イノシシ肉100％のヘルシーソーセージ

ジビエソーセージ 598円（3本入）

高知県東洋町

面積74.10㎢、人口2,583人。徳島県と隣接し、京阪神と高知を結ぶ土佐の東の玄関口。白砂青松の美しい白浜海岸や、日本屈指のサーフポイントとして年間8万人もの若者で賑わう生見（いくみ）海岸は有名。温かな潮風が育むポンカンや小夏、豊かな黒潮の流れがもたらす魚介類など、大自然の幸も豊富に揃う。

株式会社 熊谷（くまがい）ファーム
所 高知県安芸郡東洋町大字河内358-2
Tel 0887-23-9339
Fax 0887-29-3282

ジビエとは、狩猟で得た天然の野生鳥獣の食肉を意味するフランス語。ヨーロッパでは古くから、伝統ある高級食材として人気のジビエですが、日本では現在、農林業や自然環境に深刻な被害を及ぼす有害鳥獣として問題となっています。

その対策として、16年の狩猟経験をもとに自ら捕獲したイノシシやシカを有効活用し、全国各地のフレンチやイタリアンレストランなどへの素材提供や、加工品開発・販売などを行っている「熊谷ファーム」。こちらのイチオシ商品が天然イノシシ肉を使用した「ジビエソーセージ」です。

通常、市場に出回るジビエ加工肉は、使用量10%ほどのものがほとんどですが、このソーセージはイノシシ肉100%！山野を駆け回って育った野生の肉は、身が引き締まり、脂肪が少なく低カロリー。高タンパクでミネラルも豊富と栄養価も高く、ヘルシー食材として女性からの支持も高まってきています。

とはいえ、「ジビエって少しクセがあるのでは？」というイメージをお持ちの方もいるでしょう。しかし実際に食してみると、丁寧に処理された肉に臭みなどはまったくありません。ドライソーセージに近いしっかりとした歯ごたえで、噛めば噛むほど肉の奥深い旨味が溢れてきます。濃厚な味わいは、ワインやお酒とも相性抜群で、食通にはたまらない逸品です。

読者プレゼント

ジビエソーセージ（3本入×2パック） 1名様

●アンケート
Q1. 面白かった・関心を持った記事
Q2. 今後取り上げてほしい内容
Q3. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

●プレゼント応募方法
はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、右記（P15）宛先『水の源34号』読者プレゼント係までご応募ください。
【平成28年10月31日（月）消印有効】

※ 当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。

協議会だより
インフォメーション

第10回 全国水源の里シンポジウム
水源の里が創る新しい時代

in 京都府綾部市

「水源の里」が生まれて10年。水源の里振興の取組を進める全国の実践者が一堂に会し、『上流は下流を思い、下流は上流に感謝する』の理念に基づく流域連携の必要性をアピールする場として、また、10年間の取組で輝きを取り戻した水源の里がこれからも光り続けるため市民の心を一つにする場として、全国水源の里シンポジウムを開催します。

1日目　10月26日（水）

●シンポジウム 13:00～17:10　会場：京都府中丹文化会館

●基調講演
講師　**養老 孟司** 氏（東京大学名誉教授）

●パネルディスカッション
コーディネーター　**嘉田 良平** 氏（四條畷学園大学教授）
パネリスト
・**山崎 善也** 綾部市長
・**藤山 浩** 氏 （島根県中山間地域研究センター研究統括監）
・**小谷 あゆみ** 氏（フリーアナウンサー／エッセイスト）　ほか

●同時開催
第8回全国水源の里フォトコンテスト表彰式・入賞作品展
綾部市の特産品販売
水源の里在住芸術家の作品展

●交流会 18:00～20:00　会場：京 綾部ホテル

2日目　10月27日（木）

●現地視察研修 9:00～13:00
（水源の里探究コース／「森の京都」推進コース／市内散策コース）

シンポジウムは参加費無料・事前申込み不要です。お問い合わせ・お申込みは下記まで。

第10回 全国水源の里シンポジウム実行委員会
綾部市役所 水源の里・地域振興課（上林いきいきセンター）
TEL 0773－54－0095　FAX 0773－54－0096

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡先は
全国水源の里連絡協議会　水の源編集委員会
綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課　〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL：**0773-42-4271**　FAX：**0773-54-0096**　E-mail：**suigen@city.ayabe.lg.jp**
http://www.suigennosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ
『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円（送料込）
お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、過疎・高齢化の進行により消滅の危機に直面している集落を「水源の里」と呼んでいます。全国170の市町村が連携し、集落再生に向けて活動しています。

北海道

北海道
新十津川町
下川町
美深町
中川町
清里町
豊浦町

東北

青森県
西目屋村

岩手県
遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町

宮城県
七ヶ宿町
富谷町

秋田県
東成瀬村

山形県
小国町
飯豊町

福島県
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

関東

栃木県
日光市

群馬県
上野村
南牧村
みなかみ町

東京都
檜原村
奥多摩町

中部

新潟県
長岡市
津南町
関川村

福井県
おおい町

山梨県
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村

長野県
根羽村
泰阜村
上松町
木祖村
王滝村
木曽町

岐阜県
高山市
飛騨市
本巣市
揖斐川町
富加町
川辺町
七宗町
八百津町
白川町
東白川村
御嵩町
白川村

静岡県
小山町

愛知県
新城市
設楽町
東栄町
豊根村

近畿

三重県
津市
熊野市
大台町
大紀町

滋賀県
長浜市
高島市
米原市

京都府
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

兵庫県
丹波市
多可町
神河町

奈良県
天川村
川上村

和歌山県
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町

中国

鳥取県
若桜町
日野町

島根県
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
知夫村
隠岐の島町

岡山県
真庭市
里庄町
鏡野町

広島県
庄原市
神石高原町

四国

徳島県
美馬市
佐那河内村
那賀町
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町

香川県
まんのう町

愛媛県
西予市
久万高原町

高知県
東洋町
奈半利町
田野町
安田町
北川村
馬路村
芸西村
本山町
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
梼原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町

九州

佐賀県
佐賀市
多久市
嬉野市

熊本県
阿蘇市

大分県
大分市
佐伯市
臼杵市

宮崎県
延岡市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町

鹿児島県
日置市
伊佐市

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
全国農業協同組合連合会
電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
公益社団法人 大分県薬剤師会

水の源 vol.34　企画・発行：全国水源の里連絡協議会　発行：平成28年9月　編集：水の源編集委員会